革命が生んだ文化はどこに向かうのか？

寺島 佐知子

キューバ革命を理解するもっとも基本的な方法のひとつは、それを〈アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ〉に対する反動、反発として理解することだ。

ホルヘ・エドワーズ著「ペルソナ・ノングラータ」

2014年の暮れに米国とキューバの国交正常化交渉の開始が発表されて以来、キューバは世界の注目の的だ。とりわけ今年前半は、ハバナが脚光を浴びる出来事が立て続けにあったが、いずれもキューバ革命の文化的方向性が転機にあることを印象付けた。

オバマ大統領訪問に見る歩み寄りの姿勢

オバマ大統領のキューバ訪問は、まさに両国の関係性の大転換、新段階の象徴だったが、それにともなうホワイトハウス側のメディア戦略も新奇なものだった。というのも、米国の現職大統領が88年ぶりにキューバの土を踏むという日の前日、なんとキューバの人気コメディドラマの主人公“パンフィロ”とオバマ大統領が共演するユーモラスな寸劇がネットやテレビで流されたのだ。内容は《パンフィロがキューバ対アメリカの野球試合の日の天気を知りたくて（キューバの）カサブランカの気象台に電話をしたところ、なぜかホワイトハウスにかかってしまい、しかもオバマ大統領が電話に出た！》という設定。さしずめ日本なら“寅さん”が電話をしたら米大統領にかかってしまった、というところだろうか。しかもオバマ大統領は驚愕し狼狽えるパンフィロに、キューバ特有の表現を使い“¿Qué bolá?”（調子はどう？）と応じ、見る者の意表を突いた。それは笑いを誘うだけでなく、大統領がいかにキューバ通であるかを印象づけた。実際このセリフはキューバ側が用意したシナリオにはなく、ホワイトハウス側のアドリブだったのだが、米大統領に対するキューバ国民の距離感を一気に縮めたに違いない。

なお、正味3分半の同映像は、在ハバナ米国大使館の提案で撮られた。パンフィロを演じているルイス・シルバ（同番組のシナリオも担当している）の証言によると、米大使館と相談しながらシナリオを書き、ホワイトハウス側はそれを基に《大統領が電話で話すシーン》を撮影。映像をキューバのテレビ局に送り、パンフィロのシーンと合成した。

ホワイトハウスに電話してオバマ大統領と話す“パンフィロ”（YouTube）

映像は米大使館のHP等にアップされ、瞬く間に世界中に拡散した。キューバでは、テレビ番組MESA REDONDAやTELE SURで紹介されたと聞く。

翌日、家族とともにハバナに着いた大統領は、前述の寸劇でパンフィロに約束したとおりスタジオを訪れ、またしてもプロのコメディアンたちを相手に遜色のない演技を披露。《ドミノゲームを教わりながら、「私たち一家を歓待してくれたキューバ国民に大変感謝している」》と敬意と友情を込めて礼を述べた。

“パンフィロ”の家を訪れたオバマ大統領を歌って歓迎するシーン（YouTube）

パンフィロとの共演は、2編併せても10分足らずだったが、ユーモア好きのキューバ人の心を掴み、積年の反米感情を親米感情へと転換させたに違いない。どんな美辞麗句よりも効果があったはずだ。（ただし、キューバではこの2編をテレビで見た人は少なく、USBメモリやDVDによる番組宅配サービスを通して見た人が多いそうだ。）

ローリング・ストーンズの“歴史的公演”

米大統領と入れ替わりにハバナにやって来たのが、イギリスの伝説的ロックバンド、ローリングストーン

ズ。「オバマ大統領はストーンズの前座だった」というジョークが頷けるほど、こちらも世界の注目を集めた。

3月25日の夜、ストーンズは、ラテンアメリカツァーの最終地として、ハバナの複合運動場で無料野外ライブを開催した。自他共に認める「歴史的公演」だった。

なぜなら、キューバでは長い間ロックをはじめ欧米文化は、タブー視されていたからだ。長髪や細身のズボンといった欧米ファッションやロックのレコードの所持は、補導・処罰の対象となり、それだけで労働キャンプに送られた時代さえあった。1970年代になると、文化政策が硬直化し、ロックは「イデオロギー的偏向」「反革命」と見なされた。

コンサートの冒頭、ボーカルのミック・ジャガーが観衆に向かって「キューバで我々の音楽を聞くことが難しい時代があったことは知っている。だが今、我々はここにいて貴方たちのために演奏する。時代は変わりつつある」とスペイン語で高らかに宣言した背景には、そうした文化的弾圧の歴史があった。その瞬間、会場からは「自由を！」と叫ぶ声とともに歓声が湧き起った。野外会場を埋める50万とも100万ともいわれる観衆は、キューバのみならず世界各国から集まっていた。ハリウッド俳優の姿もあった。これほど大規模なロックのコンサートが開催されたのは、キューバでは初めてだった。その夜、若者は興奮し、かつて人目を忍んでロックを聞いた世代は感動に目を潤ませた。

ローリングストーンズ、ハバナ公演の案内（オフィシャルサイト）

シャネルのファッション・ショー

5月3日。ラテンアメリカで初めて、シャネルのファッションショーが、ハバナのプラド通りで行われた。パリからデザイナーやモデルが大挙してやって来た。シャネルに招待された世界各国のセレブたち（女優、スーパーモデル、ファッション関係者など）もハバナを訪れた。国内では、フィデル・カストロの息子やその孫、ラウル・カストロの娘とその子供たち、歌手のオマーラ・ポルトゥオンドらがショーに招かれていた。

だが、一般のキューバ人は締め出された。会場の周辺や数ブロック先にまでロープが張られ、警官が居並び、一般人は進入禁止とされた。これに対しネットでは多くの批判が寄せられた。一私企業が公道を借り切ってよいのか？ ショー開催にともなう多額の収入の使い道は？ キューバ人の生活とかけ離れている、などなど。知り合いのキューバ人（メキシコ在住）は、フェイスブックにニュース写真を添えて次のような投稿をした。「“輝きを取り戻したハバナ”とか“変わりゆくキューバ”という見出しを目にする度にひどく悲しくなる。一般のキューバ人の生活は少しも変わっていない。政治エリートがショーを楽しむ一方で、一般人は締め出されている」。

ちなみに、国内メディアはショーを報じなかったという。

アメリカ映画の撮影

シャネルのショーと前後して、ハバナの街中では革命後初めてアメリカ映画の撮影が行われていた。『ワイルド・スピード』という、カーアクションが売り物の映画だ。これまでロサンゼルスやマイアミのほか、リオ、東京、ロンドン等が舞台になったが、シリーズ8作目にしてハバナが舞台になる時が来た。

撮影に際しては、一時的に交通を遮断したり、騒音を立てるなど、周辺住民や交通に迷惑を及ぼす局面もあった。しかしキューバ人をスタッフとして雇い、付近の住民にも（飲食等の）サービス提供を頼む代わりに報酬を支払ったことで、苦情よりも恩恵の方が話題になり、ネット上ではさほど批判的意見は目立たなかった。

キューバを舞台にした映画やテレビ番組は今後ますます増えるだろう。すでに撮影時のサービスや技術を提供するアメリカの会社が進出するという話もある。キューバ人俳優や技術者の活躍の場が広がることが望まれる。

キューバ映画の動向

最後は、私の関心事「キューバ映画」の動向について述べたい。

キューバ映画は革命とともに生まれた。革命前のキューバに映画産業はなかった。アメリカやメキシコ

の映画会社の撮影地にはなっても、キューバ人による主体的な映画作りはわずかだった。一方、数ある映画館のスクリーンは、アメリカ映画にほぼ独占されていた。知識人は、文化的にも米国の植民地と化すことを懸念していた。また、アメリカの物質主義や商業主義に反発していた。

キューバ映画芸術産業庁（以下 ICAIC）は、革命が成就して3か月後に創設された。映画に関するあらゆる部門（製作、輸出入、配給、宣伝、保存等）を統括する機関である。

映画制作については、低予算でも質の高い作品を目指した。イタリアのネオレアリズムをはじめ、世界に範を求め日本映画にも注目した。チェ・ゲバラは、1959年に訪日した際、ある映画会社を訪れ（会社名は不明）、映画撮影所の建設を打診した。あいにく商談はまとまらなかったが、60年代後半から70年代のキューバでは、映画『座頭市』が大ブームになった。勝新太郎は、キューバで最も有名な日本人だ。

話が逸れたが、キューバ映画は早くも60年代末に黄金期を迎えた。低予算、物不足という事情を逆手に取り、創意工夫に溢れた前衛的なドキュメンタリー、キューバの歴史や現実に深く根差すフィクションを生んだのだ。映画ポスターも同様で、次々と秀作を生み、世界の注目を集めた。

強調しておきたいのは、ソ連流の社会主義リアリズムとは無縁だったこと、むしろそれを否定していたことだ。そして批評精神を尊重していた。映画人は〈より良い社会建設には健全な社会批判が欠かせない〉ことを強く意識していたからだ。その結果、テレビや新聞が取り上げない問題を映画が可視化してきた。キューバでは、新聞・テレビに比べ、映画の方が表現の自由度が高かったのだ。

70年代のキューバは「灰色の時代」と称されるが、組織として比較的自主性を保ち得たICAICは、映画音楽部門を拠点にして、「ヌエバ・トローバ」と称される、新しい音楽運動を推進。若者たちから絶大な支持を得た。

このように、ICAICは単なる映画制作機関ではなく、革命の文化を牽引してきた。ところが90年代以降、デジタル技術の発達にともないICAICに頼らずとも個人で映画を撮れるようになった。組織の後ろ盾なしに自由な映画が作れる今、キューバ映画は多様化している。と同時に、ICAIC一極主義に対する不満も出ている。すでに3年ほど前から映画人たちは、新しい「映画法」の制定を要求している。〈何をもってキューバ映画とするか〉。その定義を基に、著作権の認定、国産映画製作のための基金創設などを求めている。個人プロダクションの法的認知も必須だ。それ無しには、銀行の融資や各種助成金の申請、国内外の組織との共同制作がスムーズに進まないからだ。今のところ進捗が見られない一方で、マイアミでは、キューバで製作された映画やテレビ番組を放映する局ができた。著作権の認定を求める声は高まっている。

最後に日本とキューバの合作映画の話題を2つ紹介しておこう。

1つは、キューバの若手実力派、カルロス・キンテーラ監督が、奈良を舞台に撮った『東の狼』。藤竜也が主演し、日本を代表する監督、河瀬直美がプロデュースしている。もう1本は、阪本順治監督の『エルネスト』で、チェ・ゲバラとともに戦った日系ボリビア人、フレディ前村の人生を描く内容だ。前村を演じるのは、オダギリジョー。キューバで本格ロケをし、スタッフは日本とキューバ半々から成るという。両作品とも世界公開を視野においている。来年が楽しみだ。

『エルネスト』の阪本順治監督と主演のオダギリ・ジョー（映画.com ニュース）

（てらしま さちこ　スペイン語学校 日本イスパノアカデミー講師）

『キューバ　ー超大国を屈服させたラテンの魂』

伊藤 千尋　高文研
2016 年 1 月　206 頁　1,500 円＋税　ISBN978-4-87498-586-1

学生時代にはキューバのサトウキビ刈り国際ボランティアに参加し、朝日新聞のサンパウロ、バロセロナ、ロサンジェルス特派員を務め、キューバはじめラテンアメリカとの付き合いの長い著者のキューバ解説。

米国との国交回復に至る米国の内部事情や米州に続いた反米政権ラッシュなどの背景、「キューバの水戸黄門・カストロ」と名付けたフィデルの半生、「理想を追い求めたゲバラ」の革命から南米ボリビアでの死、「米国の干渉」の歴史、サトウキビ刈り動員やミサイル危機を経て「理想から現実へ」、1980 年代から「特派員として見てきたキューバ」について、ソ連型社会主義の弊害や危機に陥った平等主義などの課題も指摘しているが、終始キューバの生き方に共感をもって観察している。キューバ革命は社会主義を掲げて起こしたものではなく、現在も社会主義の国だと決めつけるに違和感がある、人種差別のない社会正義実現をめざした思想家ホセ・マルティ主義というべきと締めくくっている。

〔桜井 敏浩〕

『チャベス政権下のベネズエラ』

坂口 安紀編　アジア経済研究所
2016 年 2 月　245 頁　3,100 円＋税　ISBN978-4-258-29043-7

20 世紀後半の軍事政権が席捲したラテンアメリカにあって政党制民主主義を貫き、石油資源収入による経済の変容によって大土地所有制が崩壊し、社会的階層や人種の違いが相対的に調和が取れていたとされていた幻想を打ち砕いて、階層間対立を先導し社会を二分させたチャベスの 1999 年大統領就任から 2013 年 3 月の死去までの政治と経済政策を総括したもの。編者と浦部獨協大学教授にベネズエラ中央大学開発研究所の 3 人の研究者が参加し、2 年間かけて行ったアジア経済研究所の研究プロジェクトの総合研究の成果。

チャベス政権下での政治制度の変革、新しい政治アクターの誕生、支持・反対派市民社会組織の影響から始まり、チャベス政権が当初提唱した民主主義概念からの変質とその意味、「ボリバル革命」の中核であり、当時潤沢にあった石油収入を直接かつ大規模に投入して貧困層の生活水準を目指した社会開発政策「ミシオン」の効果、かならずしもネオリベラリル経済政策に対する反感がチャベスを政権につけたのではないとの反論とチャベス政権の経済政策と経済情勢、そして反米外交がどのように始まり、石油を梃子とした地域協力の枠組みの実態と意義を、チャベス政権の外交政策で考察している。

現在、石油価格の下落が引き金になってベネズエラ経済は崩壊状態にあり、政治情勢はチャベス主義支持者と反対派に二分化された社会にあって今後の混乱がどこまで進むか予想が立たないが、その根源にあるチャベス政権の 14 年間を分析した基礎的な参考文献である。

〔桜井 敏浩〕